

か思いつかない」と言います。私はすっかり忘れていましたが、先生は中森明菜のファンで、授業の用例がいつも「少女A」だったとか。生真面目さのなかにお茶目なところがありません。

卒論の口頭試問の最後に、先生から「まあ、あなたは採用試験に受かってますからねえ。」（我ながら惨憺たる出来だったので、受かっていなかったら…）そして「あなたは高校の先生になるのだから、生徒に嘘を言ってははいけません。生徒は嘘を信じますから。」とのお言葉をいただきました。岡山県の高教員となって何十年、忘れたことはありません。胸を張って「守っています」とはいえないのですが…。

卒業後何回か学会に顔を出してご挨拶をしましたが、最後にお会いしたのはいつか思い出せません。年賀状だけは出していましたが、一昨年のものが最後になってしまいました。数年前、学校現場の激変をお伝えしたところ、「国語の教育をよろしく願います」と書かれたお返事をいただき、身が引き締まりました。こうして書いていても、先生とはわずかな接点しかないのですが、還暦の今まで何とか高校教員を続けて来られたのは、間違いなく大学時代のご指導のおかげです。文法もけっこう面白いと生徒に思わせたくて、あれこれ説明する時の気持ちは学生時代の興味そのまます。今の学校では、国語の予習より「探究学習」の担当の方に時間を取られています。が、ほんやりした興味関心しかない生徒たちに、「問題点を探すが大事」「資料をできるだけたくさん見る」「出典は必ず明記」と話す時、研究室で学んだ時の心持ちが続いているのを感じています。いつまで教員を続けられるかはわかりませんが、学ぶことをずっと忘れずにいたいと思っています。

関先生、本当にありがとうございました。そして国語国文研究室に感謝を込めて、追悼文とさせていただきます。

（たなか・あつこ）

## 関一雄先生をお偲びして

小野美典

関一雄先生がお亡くなりになった。わたくしはそれを東京の地に住んでいながら知らなかった。七月に本誌の「追悼文」案内を見て知った次第である。

関先生に初めてお目にかかったのは今からちょうど四十年前、学部の二年生になって国語国文学研究室に入室した時だった。わたくしは国文学専攻だったので関先生に直接卒論指導をしていただけではない。しかし、関先生の授業の幾つかは履修させていただいた。そして何よりも、自主ゼミとして毎週開講されていた「中古ゼミ」の末席に座ることを許していただいた。国文学専攻生での参加は珍しかったと思う。

関先生は研究に対してとても真摯で誠実な先生であられた、と門外漢のわたくしは拝察する。研究となると、誰に対しても率直で忌憚のない発言をされた。わたくしが初めて学会発表をしたのは、学部四年生の時の人文学部国語国文学会だった。今から考えると「学

会発表」どころか、「授業の演習発表」にすらなっていない、実にお粗末な内容だった。その後の懇親会の席では、国文学の先生方ながら、発表の今後へのつなげ方をご指示下さったが、一人、関先生は「あんなのは研究発表じゃあないですよ。その入り口ですよ。まあ、失敗は早いうちにおいた方がいいですからね」と。当時、『平家物語』の和歌に興味を持っていたわたくしは、関先生のお言葉に「挫折と反省」というよりは、むしろサバサバとした「安堵と開放感」を抱いた。一からの出発：爾来、大きな学会で発表するようになって、万全の注意を払うのは勿論だが、最後には「あの時の失敗以上はないから大丈夫」と、変に開き直られた感じがする。

中古ゼミでは、『堤中納言物語』を読み進めていたが、国語学専攻生ばかりで、古典語の解釈や文法などを中心に各自の興味ある事項を調査・発表していた。オブザーバーの関先生ご自身が接頭語・接尾語・複合語のご研究の最前線にいらっしゃるだけに、細かい語義の違いを鋭く指摘されていた。後年、わたくしが中世・近世和歌に興味を持ってテキスト本文を読み進めるとき、知らず知らずのうちに、「関先生のような、一言一句ゆるがせにしない解釈が必要だ」と、自戒している自分の存在に気づく。四十年たった今もそう。

わたくしが院生の時だったと思う。懇親会か何かの二次会で、先生が自分語りをされたことがあった。「論文は、書いてすぐに発表してはダメなのですよ。数年は寝かせないと。そして、加筆修正して完成させる。尤もわたしにはそんな悠長な時間はないので、せい

ぜい数カ月が限度ですがね」。当時、国文学の論文とはギリギリまで呻吟・苦吟して最後は不眠不休でボロボロになりながら書き上げるものと思っていたわたくしは、別世界に住んでいらっしゃる関先生に驚愕とともに改めて畏敬の念を覚えた。わたくしも当時の関先生のご年齢に近づくにつれて、関先生のおっしゃったことが何とはなしにわかり始めた。書き上げた時は高揚感で問題ないと思っても、冷却期間を置くことで自分の原稿を冷静に第三者の視点から見るができる。自身の原稿を複眼的に見て批判することで、より強固な論考にする。それ以上に：自分の書いた原稿は可愛がってやるべき。無駄な文言、曖昧な表現はないか。推敲に推敲を重ねるほど、原稿は喜んでくれる。しかし、わたくしはまだその地点に到達できていない。苦吟の世界で迷い続けている。

先生の名著『国語複合動詞の研究』（笠間書院、一九七七年刊）の書評を、春日和男博士が『山口国文』創刊号に書かれている。春日博士は詳細な書評の掉尾に、「誤植の少ないのも全体として気持がよかった。多分著者の几帳面さと、良き助力者を得たがためである」と書かれているが、良き助力者のことはわからない。わたくしは、先生ご本人がああ黒ぶち眼鏡の奥底の鋭い眼で、恐ろしいほど長い時間をかけて根を詰めて校正されたからに違いない、と確信している。関先生のこのご著書については、近年、青木博史氏が「**『文法史の名著』** 関一雄著『国語複合動詞の研究』（日本語文法史研究 3）ひつじ書房、二〇一六年刊）で詳細に取り上げられている。畑違いのわたくしが触れるのもおこがましいが、青木氏は「複合動詞の歴史を正面から扱った唯一の書であり、今日的な目から見てもきわめて重要な成果が数多く示されている」と冒頭で述

べる。注も含めて十二ページという詳密な論考の最後で、「先行研究を尊重し、自ら蒐集した美例に基づき自ら考えるという、研究にとって最も重要な態度を、本書は一貫して示している。我々は、この成果を決して埋もれさせてはならない」と、締めくくる。

刊行から半世紀近く経っても決して色褪せず、燦然と輝く名著をものされた関一雄先生。その聲咳に接し得たことはわたくしにとつてこの上ない僥倖である。

先に中古ゼミの話をした。ゼミでは卒業祝賀会を関先生のご自宅で開催していた。二・三年生や院一年生が手作り料理で、卒業生をおもてなしする。下級生は一週間ほど前に先生のご自宅に伺って、非常に快活な奥様と料理の献立を計画した。そんなご縁があつて、わたくしは学生・院生時代に旧小郡町に在った関先生のお宅に何回か伺つたことがある。一度、わたくしがお茶を習つていとお話ししたら、奥様がお茶室の炉に火を入れて下さつて、初心者の方わたくしが点てたお薄を先生ご夫妻にお飲みいただいた。奥様はお裏流だったと記憶している。わたくしの表流のお点前との違いを詳細にお尋ねになつた。着流し姿に袖なしを羽織つていらつしやつた関先生は、にこやかに微笑みながら、奥様とわたくしの受け答えに耳を傾けていらつしやつた。関家では全ては奥様に委ねられていて、先生は好々爺然とされていた。関先生の新たな一面を覗き見た感じがした。

先生は山口大学を定年退職された後、梅光学院大学の教壇に立たれていた。その後、東京に来られた由、或る年の賀状で知つた。東

京のご住所が記されていた。毎年の年賀状には、あの独特の角張った肉太の万年筆文字で一言、叱咤激励のお言葉を書いて下さつた。

関一雄先生がお亡くなりになつた。わたくしはそれを東京の地に住んでいながら知らなかつた。

わたくしは幕末の萩藩主毛利敬親の歌集『露山集』に関する注釈と周辺調査を続けていた。その小發表を内輪の研究会で行なつた。令和五年六月十八日（日曜日）である。大変蒸し暑い日だったのを今でもはつきりと記憶している。エアコンが利いているはずなのに、発表中に何度も汗をぬぐつた。翌日の十九日に、関先生は幽明境を異にされた。前日の発表内容の一部を活字化したものが、本号に掲載した小稿である。

関一雄先生、改めてありがとうございます。

(おの・よしのり)